ALLSORTS Vol. 25

MARIKO TAKAYASU

高安 マリ子
ダンス・アーティスト

TEXT by 三村 深
PHOTO by 大田 メグミ

PROFILE
コンテンポラリー・ダンスアーティスト。アメリカ舞踊教育専門資格取得教授。京都外国語大学講師。NHK講師。舞台振付師。そして舞踊芸術監督としてマリコダンスシアターを京都で主催する。16歳で渡米、大学で心理学と舞踊を学んだのち、アメリカはもちろん、ヨーロッパ、日本、と世界を舞台に活動。京都国体のオープニングショーやアメリカ公演での振付けなど、大きな仕事をつぎつぎにこなす一方で、京都の視聴覚障害者へ身体による"自己表現"への指導も地道に行う。人生の目標は、「ダンスを通して生きる力を伝える」こと。1957年生まれ。

みる前に、跳べ！

人は、口を使って話すほかに、もうひとつの声をもっている。あるいは、もうひとつの言葉と云ってもいいのかも知れない。それは体中の筋肉の何処かにあって、いつでも表現の場を求めている。

ただ、多くの場合、そんな体の希求を意識的に、あるいは無意識的に抑制しながら生活していることが多い。

「その人を視れば、その人の体の中でどの筋肉が動きたがっているのかがわかるのよ」

彼女、高安マリ子氏は言う。

「心の動きは、けっして頭の中だけで完結するわけではない。体の、どこかの部分とかならず結びついている。何かに心を動かされたとき、体もかならず反応しようとする。たとえばイライラしたときに無意識に歩き回わる。待たされているときに何度も足を組替える。そんな経験は誰にでもあるでしょう？それは心の動きに応じて、体が反応しているから」

アメリカ・オレゴン州のエドワーズ精薄児センターで、子どもたちの手をとり、ダンスを教えたことがある。車椅子ごと指導をつづける間に、緊張、あるいは弛緩した体の中から、どの筋肉が踊りたがっているのかが徐々に伝わる。やがて音楽に合わせ高揚する子どもたちの心が見えた。

京都で視聴覚に障害をもつ人々には、今もダンスを教えている。はじめ彼等の体は全身が極度にこわばっているが、そういう体ほど、実は多くの叫びや声を筋肉の節々に潜ませている。彼女はゆっくりと、気配を感じる程度の接触を試みながら、すこしづつ自己表現の在処を教えてゆく。今ではダンスを通して自らを表現できるメンバーも増え

1

2

3

4

スイス・ローザンヌ州立美術館で開催された、『第15回ローザンヌ・ビエンナーレ展』でのパフォーマンス。入選者・八木マリヨ氏とのジョイントパフォーマンスとして、同展のオープニングセレモニーを飾った。ご紹介するのは、ご本人が所有されるものから、特別に選んで戴いたショットである（写真1、2）。
京都の視聴覚障害者にダンスを指導しているのが写真3、4。彼女のいきいきとした表情が周囲にもつたわっている。
ただ、このように静止したビジュアルではとてもその感動をお伝えすることができない。興味のあるむきは、ぜひ、実物をご覧になることをおすすめする。

「ダンスを通して生きる力や、
生きる歓びを表現したい。
ダンスは、言葉を超えた身体言語。
これからも、日本で、世界で、
その可能性を追い求めていきたい」

た。心を語るすべを知った人々にとって、もはやダンスはもうひとつの言葉となっている。

『ダンスとは体の動きを通して自らの心の動きや感情、時には自分自身を相手に伝えること。そうして観ている人々、観客の心を動かすアートだと思っている』

そんなふうに彼女は言う。それが彼女の持論である。ポートランド州立大心理学科に在籍、同大学のダンス専科で学んだのち、二十七歳の折に悟った信念だ。

これまで、彼女自身が携わってきたアート表現は無数にある。自らの舞踏表現はもちろん、振付けや演出、どれをとっても一流の仕事をこなしてきた。ブロードウェイの高名な振付師との関わりや、英国王室の指名ダンサーとの共演など、エピソードを挙げれば枚挙に暇もない。

そこで、スイスの美術館で行ったヴィエンナーレ・テキスタイル・オープニングセレモニーでの舞踏をモデルに、彼女のダンスを語ってもらった。

『その美術館には、たくさんのオブジェが置いてある。その中で観客を前に、美術館中を動きながら踊っていく。私はその時、その場に身を置いた瞬間、ぱっと感じる空気を表現する。

オブジェの周りに漂う空気。かくばったものなのか、まるい感じのものなのか、なめらかなのか、イガイガしているのか？受け止めた感覚のままに踊っていく。その作品を「見て」踊るわけではないんです。あくまでも「感じて」踊るんです。

そうして動かないものに動きを与えていく。私が動くことでその作品も動き出す。それが観客の心に伝わって、多くの人々の前に現実とは別の空間が生まれるんです』

アートは、観念では語れない。感覚的にわかったものが明瞭になればなるほど、言語化もしやすく、他者へも確実に伝えることができるはずだと彼女は言う。ただ感覚という漠然とした存在に対して、理論的ではないと考えたり、すでに固定的な概念で解釈してしまうこともありがちだ。

『それは、感性の喪失ではないか』と彼女は問題提起する。情報過多の中で、疲弊し、埋もれそうになる「感覚」を呼び醒まし、復活させ、研ぎ澄ましてゆく。そのためには、もっと自らを開いてゆかなければならない。ダンスとは、体を通して心を知り、心の動きを体へダイレクトにフィードバックする作業、まさに自らを開いてゆく作業なのだと語った。

彼女と会話していると、時折、あたりの空気が動くことがあった。それは顔の表情がかわったとき、あるいは何かジェスチュアをすると明瞭になった。その一瞬、空気はすこし緻密になり、小さな波紋を投げかけた。

そのとき、ふと劇場やスタジアムの、辺りの空気が大きく鼓動するような、熱気を帯びたあの波動を思いだした。自分の体が、その鼓動にあわせて動きだしそうになったことも。

ダンスとは、たとえばそれを実行した時に表現されるボディラングウェージなのか。だが、もはや解釈など不必要だ。ほんとうに知りたければ、見る前に跳べ！である。